

## 【9】 摩訶迦葉と阿難・トゥッラナンダー比丘尼の關係に関する エピソードの検討

[0] 摩訶迦葉と阿難の關係は敵對關係とは言えないまでも、何らかの緊張關係にあったような感じを受ける。今まで考察してきた摩訶迦葉の事績から言うと、まず第一結集において最初は摩訶迦葉が阿難をそのメンバーとして選ばなかったということ、そして摩訶迦葉によって阿難の過失が叱責されたこと、摩訶迦葉が阿難を童子のごとしと叱責したこと、それに対してトゥッラナンダー比丘尼が摩訶迦葉を「もと外道」と罵詈したこと、などに表われている。あるいは釈尊の葬儀を摩訶迦葉の到着を待って始めようとしたのが、阿難ではなくて阿那律であったこともこれと關係があるかもしれない。原始聖典にはそれ以外にも摩訶迦葉と阿難の葛藤があったことが伝えられている。そして摩訶迦葉と阿難の緊張關係には、トゥッラナンダー比丘尼も一役買っているような印象を受ける。本節ではこれら摩訶迦葉と阿難・トゥッラナンダー比丘尼の關係を語るエピソードについて検討してみたい。

[1] まず第一結集において初めは阿難がそのメンバーに選ばれなかったことについて検討してみよう。

[1-1] いずれの資料においても、第一結集に際して初めは阿難はそのメンバーに選ばれなかったとする。その理由はいずれも、その時点では阿難はまだ阿羅漢を成じていなかったからとされる。しかし阿難は釈尊の侍者として結集にはなくてはならない人物であるからとして結局はメンバーに加えられた。このいきさつの中で、最初は摩訶迦葉が阿難をメンバーに加えたがらなかった、あるいは進んで加えずにサンガなどの推薦によって加えたとする、摩訶迦葉の阿難に対する態度が表れている資料には以下のようなものがある。

〈37-1〉 *Vinaya* ; (長老たちは摩訶迦葉に) 比丘を選択して下さいと言った。しかし 500 に 1 を欠いた。比丘らは阿難はまだ有学であるけれども、世尊にしたがって法と律を多く学んでいるので、選択したまえと言った。摩訶迦葉は阿難をも選択した (*āyasmā Mahākassapo āyasmantam pi Ānandaṃ uccini*) 。

〈37-2〉 『四分律』 ; 長老たちは 499 人の阿羅漢を選び、阿難をその中に加えるべきだと言った。摩訶迦葉は「阿難有愛恚怖癡、有愛恚怖癡是故不應令在數中」と反対した。しかし世尊の教えをもっともたくさん聞いているということで参加させることになった。

〈37-3〉 『五分律』 ; 諸比丘は阿難はもっとも世尊の教えを聞いているからと、そのメンバーに加えるべきことを提案した。しかし迦葉は「阿難猶在學地。或隨愛恚癡畏不應容之」と反対した。阿難は毘舍離で解脱を得た。

B 文献には次のようなものがある。

〈37-3〉 『善見律毘婆沙』 ; 摩訶迦葉は 499 人しか選ばなかった。阿難がいないと結集が出来ないことは判っていたが、誹謗が生じるのを断じようとしたからである。しかし諸比丘が推薦したので加えられた。

〈37-4〉 『毘尼母經』 ; 諸阿羅漢は阿難がいないと経歳を結集できないと言ったが、迦葉は「阿難結漏未盡。云何得在此衆」と反対した。しかし求聽羯磨を行って僧中に入れた。

[1-2] これに反して、摩訶迦葉が阿難を推薦し、味方になったとするものもある。

〈37-4〉『十誦律』は摩訶迦葉が「是阿難好善學人。佛說阿難於多聞人中最第一。我等今當使阿難作集法人」と考えて、結集に加えたことになっている。〈37-6〉『仏般泥洹經』、〈37-7〉『般泥洹經』は摩訶迦葉らは加えるべきだと考えたが、在家信者らがまだ有学であって貪心があるのではないかと疑って審査したことになっている。また B 文献の〈37-1〉DN. A., *Samantapāsādikā* は摩訶迦葉はわざと 499 人しか選ばなかった。阿難なしでは結集はできないことはわかっていたが、なぜ有学のものを選んだかという世間の非難を避けるため (parūpavādavivajjanato) であったとする。そこで比丘たちが請うて阿難を加えたのであるという。そして〈33-1〉DN. A. は「摩訶迦葉は阿難に対して非常な親しみを持っていたので、阿難が心解脱を得たとき最初に賛辞を贈った」としている。また〈37-2〉『根本有部律』「雜事」も大迦攝波は阿難を為衆作行水人として白二羯磨で選んだが、呵責をもって阿難陀を導くために衆中で女人の出家を世尊に願ったことなどの 8 つの罪を糾弾したので、阿難陀も心解脱を得た、とする。

大乘經典の『菩薩從兜術天降神母胎說広普經』(大正 12 p.1058 上)は迦葉が阿難に「佛所說經、若有得道羅漢六通清徹者修四神足多修多行能住壽一劫有餘。卿何故默然而不報佛」と叱責し、阿那律は阿難を外に出したという。『大智度論』(大正 25 p.069 上)は阿難が阿羅漢果を成じた後「大迦葉手摩阿難頭言。我故為汝使汝得道、汝無嫌恨」と言ったとする。

[1-3] 以上のように、結集のメンバーとして阿難を加えることに際しての摩訶迦葉の態度は必ずしも明白ではない。しかし好意的に解釈するのは後世の資料であって、阿難が参加しないと結集は遂行できないとはしつつも、原始聖典では何となくわだかまりがあるように感じられる。しかもすべての資料では阿難はまだ阿羅漢を成じていなかったとするのであって、これは阿難にとっては不名誉な伝承である。ましてや阿難はこの直後に阿羅漢果を得て正規のメンバーになったとされるのであるから、阿難に好意的な伝承ならこれを伝えなかったかも知れない。

〈37-6〉『仏般泥洹經』、〈37-7〉『般泥洹經』が伝えるように、もし阿難が有学であって煩惱を断じ尽していなければ、釈尊の教を理解できないで誤解するという恐れがあるから、これは決しておろそかにはできない問題であったはずである。またそういう無学を成じていない者が聞き伝えた教えだとすると、後世になって結集によって編集された聖典の信頼にひびが入ったかも知れない。したがって結集を伝える一派としては阿難も阿羅漢でなければ不都合であったはずである。結果的に阿難を阿羅漢であったとオーソライズするなら、何もこうした阿難の不名誉を後世に残す必要性はなかった。したがって勘ぐれば、このような伝承が伝えられたこと自体に、摩訶迦葉と阿難の間にあったすき間を感じとらざるを得ない。もっとも現代のわれわれ凡夫としては、だからこそ阿難に親近感を抱くのであるが、しかし伝統的な仏教徒たちがそう感じたかどうかは疑問である。

[2] 結集においては、「小小戒 (khuddānukhuddakā sikkhāpadā)」が何を意味するのかを尋ねていなかったということから、摩訶迦葉による阿難の問責があったことになっている。この部分も詳しく見ておこう。

[2-1] この内容について A 文献は次のように言う。

〈37-1〉 *Vinaya* ; 摩訶迦葉は世尊は捨ててもよいといわれた「小小戒」についてサンガに

異論があったので、「サンガは未だ制されないものは制せず、制されたものは破らず、制にしたがって戒を持していこう」と提案して、白二羯磨によってこれを決定した。その時長老比丘らは阿難に、①何が小小戒か問わなかったこと、②踏んで世尊の雨浴衣を縫ったこと、③女人に先に世尊の舍利を礼拝させ涙に濡れさせたこと、④1劫住して下さいと頼まなかったこと、⑤女人を出家させたことの5つは悪作であって告白せよと言った。阿難は悪作とは認めないが、具寿たちを信じるからと悪作と認めて告白した。

〈37-2〉『四分律』；該当する記事なし

〈37-3〉『五分律』；迦葉は①世尊は捨ててもよいといわれた「小小戒」について「不問」であったこと、②世尊縫僧伽梨以脚指押、③三請世尊求聽女人於正法出家、④不請佛住世一劫若過一劫、⑤三反索水汝竟不奉、⑥女人先禮舍利の6つについて「應自見罪悔過」と詰問した。阿難は「我於是中不見罪相。敬信大徳今當悔過」とされている。

〈37-4〉『十誦律』；摩訶迦葉は①微細戒を不問佛、②不請久住、③以足躡佛衣、④不即取水、⑤三請令女人出家、⑥出佛陰藏相以示女人の6つについて「汝得突吉羅罪。是罪汝當如法懺悔」と責めた。阿難は一々これに反駁したが、突吉羅罪として僧中で悔過した。

〈37-5〉『僧祇律』；その時長老優波離は阿難に言った。①世尊乃至三制不聽度女人出家而汝三請、②不請佛住世、③右脚指躡世尊僧伽梨衣縫而汝不知是僧伽梨、④不與世尊取水、⑤細微戒而汝不白、⑥以佛陰馬藏示比丘尼、⑦諸老母臨世尊足上啼淚墮足上、汝爲侍者不遮の7つは越比尼罪であると。阿難は2罪は受けなかったが5罪は受けた。

〈37-6〉『仏般泥洹經』；該当する記述なし

〈37-7〉『般泥洹經』；該当する記述なし

〈37-8〉『大般涅槃經』；該当する記述なし

[2-2] B 文献では、〈37-2〉『根本有部律』「雜事」は①女人を出家せしめたこと、②於佛所不爲衆生請佛世尊住世一劫、③世尊在日爲說譬喻汝對佛前別說其事、④以脚踏振衣、⑤以濁水奉佛、⑥小隨小戒の内容を尋ねなかったこと、⑦俗衆中對諸女前現佛陰藏相、⑧自開佛黃金色身示諸女人の8つを上げる。阿難はその一々に反駁し、「嗚呼苦哉。如何我今一至於此。新離如來無依無怙。失大光明欲何所告」と悲嘆したとする。また〈37-4〉『毘尼母經』は阿難が微細戒が何かを問わなかったということから「尊者迦葉責阿難七事」として7つの事柄をもって呵責されたとするが、詳細は記されない。しかしもし女性を出家させなかったなら正法が1000年続いたのに500年に減じたことなどの10個の不利益が列挙されている。

大乘經論では『大智度論』（大正 25 p.067 中）が①女人を出家させたこと、②水を供給しなかったこと、③水を与えなかったこと、④寿命を留めることを願わなかったこと、⑤僧伽梨衣を足で踏んだこと、⑥仏の陰藏相を女人に見せたことの6つを上げる。しかし阿難は一々これに反駁している。なおこれは阿難を結集に参加させない理由としてである。

[2-3] 以上のように摩訶迦葉は多くの比丘たちの前で阿難を問責し、これに対して阿難は反駁しつつも、それを心ならずも受け入れざるを得なかったように描かれている。もちろん摩訶迦葉が阿難を問難したのは、彼が羯磨を執行する立場にあったからであって、個人的な感情のしからしめたものではなかったであろう。しかし議事進行は議長の意志が相当程度

に反映されるものであることも考慮されてよいであろう。したがってこのようなことが記憶されて伝承されたということも、何か普通でないものを感じさせる。

[3] 釈尊の入滅後ないしは入滅間近のこととされる、阿難が弟子を連れて南山に遊行して、その弟子の多くを失ってしまったことについての摩訶迦葉の叱責も両者の関係を知る重要な資料である。

[3-1] これを伝えるのは《14》であって、これについてはすでにしばしば言及した。〈14-1〉SNは阿難が南山に遊行したとき、30人ほどの同住比丘が還俗してしまって童子のみとなった。そこで摩訶迦葉が「童子」という言葉をもって咎めたところ、阿難は「白髪が生えた者を童子という」と反発したというものである。〈14-2〉『雜阿含』、〈14-2〉『別訳雜阿含』、〈14-2〉『四分律』もほぼ同様の内容である。先にも述べたようにこの経は釈尊入滅後あるいはその直前のことを記したものとされているが、比較的遅くに釈尊の弟子になったと考えられる阿難の頭にも白いものが生えてきているのであるから、なるほどそれほど早い時期のことではないと首肯される。

B文献の〈14-2〉SN-Aはこの間の事情を次のように解釈している。「ほとんど童子になった」というのは「還俗した者たち」のことで、ほとんど童子 (kumārakā)、幼い者 (daharā)、若い者 (taruṇā)、〔法臘〕1歳か2歳の比丘 (ekavassikadvevassikā bhikkhū)、未受具足の童子 (anupasampannakumārakā) であったという意である。どうして彼らは出家し、どうして還俗したか (kasmā pan' ete pabbajitā, kasmā hināyāvattā)。彼らの母・父は考えた。「阿難長老は師の信頼の厚い人である。8つの許し (cf. *Jātaka* 456) を願い出て仕えている。どこでも好きなところへ師をお連れすることができる (sathhāraṃ gahetvā gantum sakkoti)。我々の子らを彼 (阿難) のもとで出家させよう。彼 (阿難) は師をお連れくださって、師が来てくだされば我々は大恭敬を行うことを得よう」と。これだけの理由で彼らの親類は彼らを出家させた。しかるに師が般涅槃された時にその願いは断られた。そこで彼らを一日で還俗させた、と。

しかし漢訳阿含を参照すると、南山への遊行中にあまりに年少比丘の不行跡がひどいので、心ある比丘が還俗してしまったので、残ったのは年少比丘ばかりとなったというように読める。そこで摩訶迦葉は阿難を「世尊の教えをわきまえない童子のごとし」という言葉をもって叱責したのではなかろうか。このように解釈したほうが正しいとすると、パーリのアッタカターは阿難びいきの解釈とすることができる。

[3-2] そして摩訶迦葉の阿難を「童子のごとし」と叱責する言葉に反発して、トゥウラナンダーニが「もと外道」と侮辱し、「どうしてヴィデーハの聖者 (vedehamuṇi) である尊者阿難を「童子」の言葉をもって咎めるのか」という非難が続く。「ヴィデーハの聖者」は〈14-2〉では「毘提訶牟尼」、〈14-3〉では「比提醯牟尼」とされている。

これに続くのが「摩訶迦葉の弁明」で、この最後は世尊の嗣子であり法の相続者であり、摩訶迦葉が自分が釈尊から糞掃衣を譲られた者であることを誇るところで終わる。〈14-1〉〈14-2〉〈14-3〉ともに同じであり、B文献の〈14-5〉『根本有部律』も同様である。「ヴィデーハの聖者」の意味はよくわからないが<sup>(1)</sup>、あきらかに仏と同等とされる摩訶迦葉に対するトゥウラナンダー比丘尼の対抗意識が言わしめたような印象を受ける。この言葉は

〈13-1〉 SN.、〈13-2〉『雜阿含』、〈13-3〉『別訳雜阿含』にも見られる。しかしこの経に限って言えば、トゥッラナンダー比丘尼が阿難を「ヴィデーハの聖者」と持ち上げるのに対して、摩訶迦葉の自分は世尊の嗣子であり法の相続者であり、釈尊から糞掃衣を譲られたほどの者であるという言葉が続くのであるから、むしろ摩訶迦葉の方が対抗意識を持って発言したということになる。このように摩訶迦葉と阿難の間にある種のわだかまりがあったことは事実として認めないわけにはいかないであろう。

- (1) 田村典子「仏弟子アーナンダの呼称 *vedehamuṇi* について」(『インド哲学仏教学研究』  
11 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部 インド哲学仏教学研究室 2004年3月)  
参照

[4] 以上、今まで取り上げてきた摩訶迦葉のエピソードのなかに含まれる摩訶迦葉と阿難の関係を詳しく見てきた。このほかにも摩訶迦葉と阿難との関係が知られる資料があるので順次それを紹介してゆく。

[4-1] 《13》は阿難に懲慙されていった比丘尼サンガで摩訶迦葉がトゥッラティッサー比丘尼に侮辱されるというエピソードである。〈13-1〉 SN.では比丘尼は「ヴィデーハの聖者」である尊者阿難の前で説法するのは「針商人が針師に針を売ろうとするようなものだ」と言い、これに対して阿難が「大徳迦葉よ、忍ぶべし。女人は愚かなるものなり」と取りなしたのに対して、迦葉は「友、阿難よ、待て。サンガがことさらに汝を追求しないように」と言い、さらに汝は世尊から九次第定と五神通を得ていると印可されたか、自分は印可されたと話した、とされる。ここでは阿難は迦葉を尊者 (*bhante*) と呼び、迦葉は阿難を友 (*āvuso*) と呼んでいる。なお〈13-2〉は半座を分かれたこと、月喩をもって讃められたこと、〈13-3〉は月喩によって讃められたこともあわせて主張されている。月喩をもって讃められたというのは資料の《6》を指す。

〈13-2〉『雜阿含』、〈13-3〉『別訳雜阿含』もほぼ同じであるが、ここでは比丘尼の名が「儉羅難陀」とされている。この部分のパーリのアッタカター 〈13-1〉は「トゥッラティッサーとは身体が大きいからトゥッラーと言い (*sarirena thullā*)、名前をティッサーと言う (*nāmena tissā*)」とするのみであり、直後の SN. 016-011 に出るトゥッラナンダーとの関係には全く触れないから、別人と見ていたのかもしれない。しかし両者ともに阿難のことを「ヴィデーハの聖者」と呼ぶことでは共通しており、漢訳では両者ともにトゥッラナンダーと解しているのであるから、本稿ではこれらは同一人であると解釈してきた。なおこのアッタカターでは「ことさらに汝を追及しないように」というのは、「阿難と彼女の間には親愛か愛情があるのだらうと、このように阿難についてサンガが考えないようにやめなさいと言ったのである」とされている。確かにトゥッラナンダーの阿難に対する思い入れはその背後に何かあると推測させかねないものがあるのは否定できない。

なおここに登場するパーリのトゥッラティッサーとトゥッラナンダーが同じ人物であるとすれば、先程の南山遊行に関する経が釈尊入滅後あるいはその直前とされるように、これもそれとそれほど隔たっていない時期のものであろう。摩訶迦葉と阿難とトゥッラナンダーの三人の登場人物が揃うというシチュエーションが一致するからである。ただしパーリのこの経の舞台は舎衛城であるが、漢訳は耆闍崛山ということになっている。もし後者を採るな

らば、その舞台も共通することになる。

[5] 《9》は釈尊が摩訶迦葉に法を説けと命じられたに拘わらず、摩訶迦葉が「阿難と阿那律の弟子、もしくは阿難と目連の弟子が互いにどちらが多く知っているかと議論していて法を説く環境にはない」とこれを断ったというエピソードである。

[5-1] 〈9-2〉『雜阿含』と〈9-3〉『別訳雜阿含』は、これをそばで聞いていた阿難が彼らは新参の比丘だからとかばったとき、摩訶迦葉は「汝且默然。莫令我於僧中間汝事」、「爾止阿難。汝莫僧中作偏黨語」と一喝したことになっている。釈尊の面前で阿難を一喝するということは尋常ではないと考えざるを得ない。

しかも〈9-2〉の「莫令我於僧中間汝事」は、「サンガの中で私にあなたのことについて問わしめるな」というのであるから、これ以上弁解するならサンガの面前であなたのことを詰問しなければならないぞと、脅しているようにも見える。〈9-3〉の「汝莫僧中作偏黨語」は「サンガの中でグループを作るな」というのであるから、これもただならぬ発言というべきであろう。この言葉は「破僧」というイメージに結びつくからである。

ただし〈9-1〉SNにはこの一喝場面はない。前項に取り上げた〈13-1〉に「阿難よ待て。サンガがことさらに汝を追及しないように」という言葉が出るのでこれと入れ替わってしまっているのであろう。B文献の〈9-2〉『出曜經』は摩訶迦葉が阿難を一喝しない〈9-1〉と同じパターンのものである。

[6] 《43》には摩訶迦葉とトゥッラナンダー比丘尼がからむいくつかのエピソードを掲げておいた。

[6-1] この中の〈43-2〉〈43-3〉〈43-4〉〈43-5〉に阿難が登場する。すべて『十誦律』である。これはトゥッラナンダー比丘尼が不行跡を行ったが、摩訶迦葉は「悪女よ、我は汝を責めず。我れ阿難を責む」と言ったとするものである。釈尊が女性の出家を許された因縁は「律蔵」の「比丘尼毘度」に語られるが<sup>(1)</sup>、おそらく阿難が取りなして女性を出家させたことに対する非難の意が含まれているのではないかと思われる。とするならば女性は出家修行するに値しない者という認識が持たれていて、トゥッラナンダー比丘尼がそれを象徴しているということになる。原始聖典ではトゥッラナンダー比丘尼は必ずしもいつも阿難と関連して登場するわけではない。彼女は六群比丘と対照されるような形で、悪比丘尼の代表として現われる。しかし彼女が阿難との関係で語られる場合は、上記のような因縁が背後にあるものと考えられる。

〈43-8〉『僧祇律』にも阿難が登場するが、摩訶迦葉が小象であるのに大切にして、大象をないがしろにするとトゥッラナンダー比丘尼がある檀越を非難したとするもので、「大象」の中に阿難が含まれる。トゥッラナンダー比丘尼が阿難と親密であって、摩訶迦葉を蛇蝎のごとく嫌っていたことを物語るものである<sup>(2)</sup>。そしてこれ以外の〈43-1〉『十誦律』、〈43-6〉『十誦律』、〈43-7〉『十誦律』、〈43-9〉『僧祇律』は阿難が登場せず、トゥッラナンダー比丘尼が摩訶迦葉を嫌っていたことのみが記されている。

[6-2] B文献の〈43-2〉『根本有部律』、〈43-4〉『根本有部律』「雜事」、〈43-5〉『根本有部律』「雜事」、〈43-6〉『根本有部律』「雜事」はA文献の『十誦律』と同じ構造のもので、不行跡を行っ

た吐羅難陀苾芻尼に「あなたに罪はない、このような悪行の女類を無理に頼み込んで出家近円せしめた阿難陀の過失である」と言ったとされている。ここでは阿難が女性を出家させたことが明示されているわけである。《43》のなかの他の〈43-1〉『根本有部律』には阿難は登場せず、吐羅難陀苾芻尼が迦葉を嫌っていたことのみが述べられている。

〔26-2〕『根本有部律』はマハーパジャーパティーのもとで出家した摩訶迦葉の元妻の妙賢が、美しいがゆえに乞食に出ると雑音が多いので、世尊の許しを得たうえで摩訶迦葉が自分の得た食物の半分を与えているのを見た吐羅難陀尼が「先與妙賢居一柱觀。十二年中淨修梵行。乃於今日翻有私情。乞食相濟」と侮辱した、とする。

- (1) 原始仏教の女性観については拙著『初期仏教教団の運営理念と実際』（国書刊行会 平成12年12月）の第1章・第3節「『律蔵』における女性と『経蔵』の理念」を参照されたい。
- (2) 『僧祇律』「尼薩耆波夜提 005」（大正22 p.300下）は、偷難陀比丘尼は阿難の出家前の妻であったとする。

〔7〕阿難は摩訶迦葉を尊敬するあまり名を唱えられなかったとするものがある。

〔7-1〕〈33-1〉 *Vinaya* であって、摩訶迦葉より具足戒を受けたいと願う者がいて、摩訶迦葉は阿難に「阿難よ、この人に具足戒の表白をせよ (*imaṃ anussāveṣṣati*) 」と言った。阿難は「私は長老の名を唱えることができません (*nāhaṃ ussahāmi therassa nāmaṃ gahetum*) 、長老は私の尊重するところですから (*garu me thero*) 」と言った、とされる。これは摩訶迦葉と阿難との確執を語るものではなく、むしろ阿難が摩訶迦葉を尊敬していたということを示すが、しかし以上のような関係を前提にしてみると、素直に読めないところもないではない。ただしこれには相応する漢訳はない。

〔8〕以上のように摩訶迦葉と阿難の関係はあまりしっくりいかない関係にあったように思われる。第一結集の際に摩訶迦葉が阿難を詰問したことは必ずしも摩訶迦葉の阿難に対する個人的な感情ではなかったであろうが、とって阿難を弁護するという態度を汲み取ることもできない。これに対して阿難は弁駁しつつも、不承不承に悔過に応じたとしている。ここから2人の間にあった感情を推測することができる。B資料のなかには、そうした阿難に対する摩訶迦葉の厳しい態度は阿難を愛するが故の督励であったとするものもあるが、それは好意的解釈であろう。

それでは摩訶迦葉が阿難をこころよく思わなかった理由は何であったのであろうか。推測の域を出ないが、次のように考えられないであろうか。

まず摩訶迦葉が頭陀行を行じるいわば古いタイプの修行者の代表であるに対して、阿難は師にべったりと依存し、一人で阿蘭若に住することをしないような新しいタイプの修行者の代表であって、摩訶迦葉はこのような阿難をついに理解することができなかったのではないであろうか。阿難が釈尊の侍者を勤めていたとしても、釈尊から離れて別々に遊行することもあったのではないかと想像するが、しかしパーリのアッタカター 〈14-2〉 *SN-A* は「摩訶迦葉の弁明」の発端になった南山の遊行について、「阿難長老は25年の間、影のように釈尊の後に従っていたので比丘サンガとともに遊行する機会はなかった。だから少年比丘と南山に遊行したのは師の般涅槃の年である」としている。もしそうなら摩訶迦葉とは対極的

な修行をしていたわけである。すなわち阿難は「自立」していなかったのであって、そこで「童子」の如しという罵言の言葉が出たのではなかろうか。

そうした流れの中に、阿難が女性の出家を取りなしたということもあったであろう。摩訶迦葉のような古いタイプの修行者には女性を出家させるということは考えられなかったではあるまいか。それが第一結集の詰問にも現われている。女性を出家させたことのほかにも、女性に釈尊の陰蔵相を見せたこと、釈尊の遺体を女性の涙で汚したことも女性と関係する。摩訶迦葉と阿難の確執の間にはいつもトゥッラナンダー比丘尼や比丘尼サンガが介在しているような印象があるのもそれを証明する。

また法の継承者を自任する摩訶迦葉にとっては、女性を出家させたことによって正法が500年も早く滅するということが堪えられないことであったであろう。

その他、小小戒の内容を尋ねなかったこと、留多寿を請わなかったこと、衣を足で踏んだこと、水を差し上げなかったことなどは、阿難の侍者としての責任を果たさなかったことが責められたとも解釈されるが、ある意味では阿難がまだ有学として悪魔に惑わされるという境地にしか達していなかったということもあったかもしれない。